

半世紀前からの

贈り物



「今、蘇る『文集』」

前号までのあらすじ

思いもかけず内田氏に届いた小学2年のときの文集。

文集を開くと、同級生たちの懐かしい文章が目飛び込んできました。いろいろなテーマごとに書かれている文集を読み進むうち、自分の書いた文集に行き当たりました。そして、次には…。



遊びについてもいろいろ書かれています。

ゆき

雪がはやくふるといいのだがな、雪がふると雪で大きい雪だるまをこしゃって雪がっせんをやる。大きい雪だるまのうしろにかかれると、あてられんではないぞ。

(M・O男児)

蒲郡市民間大使

内田雅敏・プロフィール

蒲郡町生まれ

東京弁護士会所属

著書「乗っ取り弁護士」

「これが犯罪?ピラ配りで逮捕を考える」など多数

当時は今のように、地球温暖化も進んでおらず、冬には故郷の町にも時々雪がふることもあった。

なわとび

私たちはみんなでなわとびをしました。わたしの番が来たので、おもしろいとんだ。

てベース

たかちゃんとしてベースをしました。ぼくはへばいから負けるなとあきらめていたら勝っていました。

(M・I男児)

当時は今のように同級生とだけでなく、上級生、下級生が混然一体となつて遊んだ。下級生は上級生から遊びを教わり、上級生は下級生の面倒を見ることを遊びを通して、幼い者に対する思いやりということを学んだ。もちろん、悪いことも教えられたり、はじめもあつたが、今のようにいじめが原因の自殺などということ

はなかった。振り返ってみると、後述するように随分と危ないことをしていたような気がする。

遊びの方法も、石ころ1つ、釘1本、空き缶1つでもあれば、いろいろ工夫できた。竹を切つて刀に見立て、チャンバラごっこ(こんなことばも、やがて死語となるのであるうか)をしたり、竹馬を作つて遊んだ。「竹馬の友」という言葉に少しは実感があつた。

夏の日の早朝、学校に行く前に友人と一緒に少しばかり遠出をしクワガタを捕まえに行つたのも楽しい思い出。クワガタのいる樹液の豊富な木は、毎年同じである。河原の林の中に入り、めざす木の下に行き、両手で揺すつてみる。ポットと音がしたあたり草むらを探してみると木から落とされたクワガタが、仰向けになつて手足を動かしている。それを捕まえるのだが、両手足をバタバタさせているクワガタを見つけたときのニカッとした気分は忘れられない。

貧しい時代で子供用の自転車を買ってもらえる子供は少なく、大人用の自転車のサドルとペダルとハンドルを結んだ三角形のフレームの中に片足を突っ込んで

で三角乗りをする子もいた。今では、もうあのように器用に三角乗りのできる子供は見かけることができない。

男の子にとって遊びの一番の人気は、空地を利用しての「三角ベース」―ベースボール(ソフトボール)だが、人数、広さが足りないため、四角のダイヤモンドではなく、二塁を欠き、ホームベース、一塁、三塁の三角形でプレーした―だった。

「戦後民主主義」と「三角ベース」は同義語であつた。バットとボールだけでグローブといつても本格的なものも誰も持つておらず、部分的に皮を貼り付けた布製のものだった。そんな中で1人だけ皮製の本格的なグローブを持つているKという子供がいた。叔父がプロ野球の選手で、そのお古をもらつたのだ。確か地元中日ドラゴンズの井上というレギュラー選手だった。親戚にプロ野球選手がいるということが子供たちにとってどんなにうらやましいものであつたかは、今の子供たちには想像できないかもしれない。野球選手になること、それが男の子供たちにとっての夢であつた時代のことだ。(つづく)